アブソルハンター・ウロスバ

丹田二百ヶ池　阿蓮

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

災いを呼ぶポケモンとして恐れられていたポケモン。アブソル。

住人たちはアブソルが現れると災いが来ると思い込み逃げ惑うのだった…

だが、そんな災いポケモン、アブソルをこよなく愛する男がいた…

※この話は超不定期更新です。

※ポケモンについているイメージが著しく崩れる場合があります（例…クールなポケモンがはっちゃけていたり極悪に見えるポケモンがかなりキュートな性格だったり）

※この作品はにじファン時代に書いていたものです（現在は削除済み）。

上記の点でも大丈夫な方はどうぞご覧ください。

目　次

ＭＩＳＳＩＯＮ１：側方注意　――　１
ＭＩＳＳＩＯＮ２：戦闘捕獲を試みよ！
――――――――――――――――　８

ＭＩＳＳＩＯＮ１：側方注意

ここは穏やかな森林地帯…湖のほとりや洞窟の中、また森の木陰などでポケモンたちが自由気ままにそれぞれのやりたいことをやっていた…

人間もまたこの森林地帯の一部で村をつくり暮らしていた…

村にはポケモンバトルをしあうトレーナーやポケモンたちを育てるブリーダー、中にはポケモンをさらっては売りさばくという悪人もいる…

この物語の主人公ウロスバもかつてはこの森林地帯にある村の住人であったが、彼は3年前からずっと家には帰っていない。

彼の目的はわざわいポケモン、アブソルを捕まえること。

そしてアブソルを捕まえるまでは家に帰らないと誓っていたのだ。

彼のアブソルを愛する心は（色々な意味で）並外れている…

「ハーッハッハッハ!!!」

ウロスバは村から少し離れた一つ岩の上で高らかに笑っている。

その笑い声に驚いたマメパトやポッポたちが驚いて一気に飛び去って行った。

「あれ？ウロスバ、また何か思いついたの？」

ウロスバの隣にいた少年、チャイが呆れた表情でウロスバを睨んだ。
チャイはウロスバから勝手に助手という名目で連れてこられた挙句、ウロスバ以上に災いの被害者となっている。
彼はウロスバの高笑いが何か（愚策を）思いついた合図だと教わっていたのだ。
ウロスバは自分の持つ白いつばつきの帽子を目深にかぶると白い手帳を取り出した。
「ふっふっふ…私の作戦はこれまで幾多にも失敗してきた…その原因はこの服にあると思うんだ…」
ウロスバは自分の身にまとっている服をところどころ指差した。
彼の服装はアブソルの色にちなんでほぼ全体を白と黒で固めており、緑の多い森の中では十分目立ってしまう。
チャイは一瞬頷いたものの、過去に服を変えて失敗に終わっていることを急に思い出した。
「ちょっと待って!それって去年もやった作戦にあったけど、見事に失敗したじゃないか!『カテゴリーその３２：地味な服作戦』は効果が無いよ!!」
ウロスバはぎくりとした表情だ。どうやらチャイの牽制が彼にとっては図星だったようだ。
「な、なに。まだ1回だ!二度も同じミスはしないさ!」

ウロスバはそういうとすぐさまターンして（いつの間にか仕込んでいた）緑一色の服に着替えた。

チャイはため息をつくと自分も緑一色の服に着替えた。

「それで、今回はどういう作戦なの?まさか、カテゴリーその３２をそのまま実行するなんてことないよね?」

チャイは疑いの目をウロスバに向けたがウロスバは待ってましたと言わんばかりの表情でフフフと笑っている。

「実はだねチャイ君。全くその通りなのだよ!」

ウロスバは一枚岩から飛び降りると決めポーズをしながらチャイにグッドラックのポーズを見せた。

チャイはもちろん納得がいかない。

「ちょっと待ってよ!それで僕がどんな目に遭ったか知ってるの!?あの後スピアーの大群にハチの巣にされるところだったんだよ!!?もう僕は行かないよ!!!」

ウロスバは何故か笑いをこらえている。彼の顔に反省の色は無いようだ。

「チャイ君、傑作じゃないか…そんな冗談が言えるなんて…プッ!!!」

ウロスバの態度にチャイは怒りをあらわにしている。

その怒りによってチャイの目から光が消えた。

「ウロスバ、一旦死ぬカ？」
「…ごめんなさい」
　チャイの鬼気迫る殺気にウロスバは顔を青ざめて謝ったが、大樹の方で何かを発見しチャイもろとも草むらの中に身を隠した。
「ちょ、ちょっと！いったい何が…むぐっ!?」
　ウロスバは不満げなチャイの口を急にふさいだ。
　そして無言で１本の大樹を静かに指差した。
「あ、あれはアブソルだ…！」
　チャイの目にはアブソルがツノをピクピクさせながら木陰で身を休めているのが見えた。
　休んでいても災いの察知は続けているのだろう…
「それでどうするの？」
　チャイの問いも聞かずウロスバはただじっとチャンスをうかがっているようだった。
　ウロスバの目にはアブソルしか映っていないようだ。
『ウロスバ、本気になってる…こう見るとプロのハンターなんだけどなあ…』
　アブソルがアクビをした瞬間、ウロスバの目が光った。
「今だ！アーブソぐっはあ!!!」

ウロスバがアブソルを捕獲するために草むらから飛び出した瞬間、ウロスバの右側から何者かが彼にぶつかり、そのまま彼を連れて行ってしまった。
「ウロスバ!…あぁ、はいはい」
チャイはあまりの出来事に驚いてはいたが、原因がはっきりとわかるとまたかと言わんばかりの表情で草の生えた地面に腰を静かに下ろした。
しかしウロスバはアブソル自身が自分の方へ飛び出してきたと勘違いしてかなりうっとりとしている。
「ああアブソル…君はなんてアグレッシブなんだ…君を追ってはや3年…触ることさえできなかった君にようやく触ることが出来た…私を抱え込むかのようなふわふわかつ暖かい体毛、そして2本足で走るかのようなこのスピード…」
ウロスバはここで何かがおかしいことに気づいた。アブソルは2本足で走るわけがない。ましてや抱え込むすべがない。
ウロスバがハッとして上を見るとそこではメスと思われるコジョンドがウロスバに向かってウインクして走っていた。
「こらーっ!またお前かコジョンド!!」
コジョンドは自分の名前が呼ばれると嬉しそうにニコッと微笑みかけた。
このコジョンドは2年前、怪我しているところをウロスバに治療された際に気に入っ

てしまい、彼を追いかけてきてはアブソルゲットを妨げていた元凶の４割である。
「君は何度私の任務を邪魔するのだ!?今私は任務の真っ最中だぞ!?だからお願い！下ろしてくれ!!!頼むから！おいチャイ君！いたら君からも何か言ってくれ！」
　ウロスバの必死な願いも聞かずにチャイは自分のバッグからサンドイッチを取り出すと、おもむろに食べ始めた。
「ひどいよーー！鬼ーー！悪魔ー!!たーすーけーてー!!!」
　ウロスバはチャイに対する悪口雑言と断末魔にも似た叫びを残してそのままコジョンドにさらわれていった…
　アブソルはこの叫びで完全に目を覚ましたようで、猫のように少し伸びをした後森の奥へと消えた。
　チャイは「今回は何日かかるかな?」と呟きながらお手製のお茶を水筒からコップに注いで一口飲んだ。
　そしてウロスバはというと…
「痛い！そんなに強く抱きしめないでくれ！というより放して！」
「コージョッ♪」
　コジョンドの住処と思われる小さな洞窟の中でコジョンドに抱きしめられていた。
「痛い痛い痛い痛い!!!だから放してってば!!!」

「コジョ♪」

コジョンドは彼を放すどころかより一層強く抱きしめ始めた。

「ひぎゃあああっ!!!チャイーー!助けてー!!!」

彼の悲痛な叫びは夕焼けで赤く染まった山々に虚しくこだまするだけで、チャイが助けにくることは無かった…

ＭＩＳＳＩＯＮ１：ＦＡＩＬＥＤ！

ＭＩＳＳＩＯＮ２：戦闘捕獲を試みよ！

ある晴れた日。

村では大人が気持ちよさそうに深呼吸しながら洗濯物を干したり、ポケモンの日向ぼっこをさせたりしていた…

そんな中一人、村から離れて森林地帯を真っ直ぐ北へと走る少年がいた…

「あの山に何があるんだろう…もしかしてウロスバ、また変な事を考えたんじゃ…いや、もしかしてもないか…」

ウロスバのパートナー、チャイだ。

彼はウロスバから『森林地帯の奥地と言われている山に来い』との連絡を受け向かっているところだった。もちろん彼はウロスバがまた何か（愚策を）思いついたと考えていた。

チャイが山にたどり着いたとき、ウロスバは彼を歓迎した。

彼の服はコジョンドに締め付けられた跡で若干ボロボロだ。

「よく来たぞ我がパートナー、チャイよ！今回の作戦はこれだ！」

ウロスバがチャイに見せたのは何の変哲もないモンスターボールだった。

「…で？」

チャイは半目でウロスバを睨んでいる。

どこからどう見てもただのモンスターボールであり、これだけでは全く作戦がわからない。

「つまりだ。今回は久々にバトルしようかと考えているのだよ…まあ戦うのは3年ぶりだがね」

チャイは驚いた表情を見せている。

その驚きには、アブソル好きであるウロスバがポケモンを持っているということもあったが、彼の口から「バトルしようかと考えている」という基本的な言葉が出たことの方が大きかった。

「ウロスバってポケモン持ってたの!?知らなかったよ！」

ウロスバは若干恥ずかしげに頷いてボールを専用のポーチに入れた。

「ああ2体いる。だが1体は回復専用として使っているから、実質戦えるのは1体だ」

彼の目はいつにも増して本気だ。

チャイはここまで真剣な目をしているウロスバを見たことが無かった。

「それじゃあアブソルを見つけたら教えるね！」

「頼んだぞ」

ウロスバとチャイは山にあった大岩に隠れてアブソルが来るのを待った。
しかし時は過ぎてもアブソルは現れない…
待っている間もウロスバはボールをしっかりと手に持って臨戦態勢を取っている。
アブソルは現れないまま辺りは暗くなり、暗い夜となってしまった。
「ウロスバ、今日は現れないんじゃないの？」
チャイの問いかけにも答えず、ウロスバはただじっとしてアブソルを待っている…
彼の目は何かを見極めているようにも見えた。
その時、ウロスバたちが隠れる岩の向こう側にある岩の陰からアブソルが現れた！
２人はそれを見つけると今か今かと飛び出すタイミングをうかがった。
アブソルは２人の気配を察知したようで戦闘態勢についている。
「今だ！戦いを申し込むぞアブソル！」
ウロスバがアブソルの前に飛び出してきた。
アブソルはいつ攻撃してもおかしくない状態だ。
「いくぞ！私のポケモンだ！行け！」
ウロスバはとっておきのモンスターボールを投げた！
チャイは彼の持っているポケモンを知らない。そのため何が出てくるのかわくわくしている。

『ウロスバの持っているポケモンって何なんだろう?ウロスバのルックスとか性格とかで考えるとロズレイド?それとも案外ルカリオとかカッコいいポケモン?うーん何だろう!?』

ウロスバのボールから出てきたポケモンは……

「えっ?」

チャイは意外だという表情をしている。

彼の持っていたポケモン。それは…

「ネイ…ティオ……?」

チャイの目の前には確かにネイティオの姿があった。

ネイティオは無言でアブソルを見つめている。

「驚いたかねチャイ君?」

「うん…」

チャイはウロスバの出したネイティオをまじまじと見ながら頷いた。

ウロスバがネイティオを持っているというイメージが全くなかったため彼にはかなり新鮮な光景だ。

「さて、行くぞネイティオ!まずはあいさつ代わりの電磁波だ!」

ネイティオはコクンと頷くとアブソルめがけて電磁波を放った。

アブソルはかわそうとするもネイティオの素早さに劣ったか、電磁波に当たってしまった！

「かかった！」

チャイは興奮した様子でネイティオとアブソルの戦いを眺めていた。

アブソルは身体がしびれて動くのもままならない様子だ。

だが、苦し紛れにアブソルはネイティオに向かい辻斬りを放ってきた！

「来るぞネイティオ!!かわせ！」

ネイティオはアブソルの辻斬りをヒラリとかわした。

アブソルは勢い余って地面にぶつかったがすぐに体勢を立て直し、ネイティオの様子を伺っている。

「ここでとどめを出してやれネイティオ！私たちの修行の成果を見せてやろうではないか！」

ネイティオはコクンと頷いた。その目には何か熱いものを感じる…

チャイもまたウロスバとネイティオのコンビネーションと彼らの技に期待を膨らませている…

「必殺！サイコキネシス!!!」

ウロスバは自信満々に叫んだが、チャイはそれを聞いた瞬間期待が一気に冷めたのを

感じた。
ネイティオもまた自信満々にサイコキネシスを放つがアブソルには何の変化も見当たらない。
「ハッハッハッハ！私たちの美しい技に見とれて言葉も出ないか！そうかそうか！」
ウロスバは勝ち誇ったように大笑いしているがアブソルは呆然として立ち尽くしている。
「ちょ、ちょっとウロスバ！エスパータイプの技はあくタイプのアブソルには効かないよ!!?」
「そ、そうなの!?」
大笑いしていたウロスバもそれに気づいたようで、助けを求めるかのようにチャイに視線を送った。
「しょうがないな…」
チャイが呆れてウロスバのところへ駆け寄ろうとしたが、そこにアブソルが怒りにも似た感情で彼らにかまいたちを放った。
「ギャース！」
ネイティオはひらりとかわしたものの、ウロスバとチャイは共に餌食となってしまった…

そしてアブソルはそのまま山を駆け下りて逃げていった…

しばらくしてウロスバが目を覚ました時、ハピナスが呆れた表情でウロスバの手当てをしていた…

隣ではチャイが疲れたように眠っていた。

「あれ？私はハピナスを出した覚えはないぞ？」

ハピナスはつんけんとした態度でネイティオを指した。

ネイティオは申し訳なさそうにウロスバのもとに寄ってきた。

ウロスバは今にも泣きそうなネイティオの翼（？）にそっと手をやって励ました。

「謝らなくていいよ…あれは私の指示ミスが原因だ…それに君は頑張ってくれた…だから…その…ありがとう…」

「!!」

ネイティオは顔を赤らめながら感動と照れ隠しで体当たりのような技を出すとモンスターボールの中に戻ってしまった。

ハピナスはまたかといわんばかりにため息をついた。

「いたたた…あれ？この技…ネイティオ…君は『とんぼがえり』を覚えていたのか…ん？とんぼがえり…？」

ウロスバはチャイの持っていた『ポケモンバトル入門』という本をめくって、とんぼ

がえりとアブソルについて調べた。
「なんと！虫タイプの技はアブソルに効果抜群だったのか！３年もブランクがあるとここまで落ちるのか…不覚だった…何々？『あくタイプのポケモンは虫タイプの他に格闘タイプが効果抜群です。しっかりと覚えましょう』か…ん？格闘…？」
格闘タイプとしてウロスバはあのポケモンを思い出して寒気が走った。
そう。格闘タイプの『あのポケモン』だ。
「アブソルゲットの為に我が身は犠牲にしたくないな…よし！明日はネイティオととんぼがえりの特訓でもするかな…そうだハピナス、オレンの実とオボンの実でパイを作ってみたんだが食べるか？ネイティオもボールに戻ってないで食べよう！」
ウロスバは恥ずかしがるネイティオをボールから出して３人でパイを食べ始めた。
「我ながら美味い！チャイは…」
ウロスバはチャイを起こそうとしたが彼のあまりにも気持ちよさそうな寝顔に起こすのが申し訳なくなり、そのまま寝せておいた…
「よし！今度こそはアブソルをゲットするぞ！今に見ていろアブソル！ハッハッハッハ！」
彼の笑い声は静かな山に力強く響いていた…
森林地帯のポケモンや旅人達にもその声は聞こえていたが、特にうるさいとも考えず

にそれぞれの道へと進んでいった……

ＭＩＳＳＩＯＮ　ＦＡＩＬＥＤ！